三重大学教育学部研究紀要　第57巻　社会科学　(2006)　63－79頁

世代間比較からみた子どもの居場所に関する研究
－ 個人的居場所の場合 －

中島喜代子・小長井明美・木屋　真依

Studies on the Children's Place from the viewpoint of comparison between generations
－ The Case of the individual Place －

Kiyoko NAKAJIMA, Akemi KONAGAI and Mai KIYA

要　旨

現在、「子どもの「居場所」がない」といわれているが、子どもの「居場所」がどのように変化したのか実証的に研究されていない。そこで本研究では、子どもの「居場所」を世代間比較を通して検討し、現在の子どもの「居場所」の実態と特徴を明らかにする事を目的としている。この目的を達成するため、「居場所」の定義および理論的枠組みを考察した上で、高校生とその保護者を対象に調査を行った。本研究では、「居場所」を〈他者との関わり〉の視点から「社会的居場所」と「個人的居場所」に分類した。さらに、「個人的居場所」についてはその意味内容と要求の次元から4つの種類に分けて調査し検討した。なお、今回は特に「個人的居場所」についての報告である。調査の結果、以下の知見を得た。

〈子ども世代〉の方が家庭、地域における個人的居場所の所有率は高くなっているが、学校における個人的居場所はみつけにくくなっているといえる。これは、〈子ども世代〉の方が家庭において子ども部屋の専用個室化、地域ではお店を多用途に利用していることと関係していると考えられる。

また、両世代ともに、家庭・学校・地域すべてに個人的居場所のある子どもは3～4割おり、どこにも居場所のない子どもも0.5～1割存在している。

家庭に個人的居場所のある子どもが多い中、家庭にはないが、学校や地域にはある子どもも5～7％みられる。このことから、個人的居場所の中心となる場所は家庭であるが、それ以外の場所に個人的居場所を求めている子どももおり、学校や地域が個人的居場所を補完していることが明らかになった。

1．はじめに

現在、子どもを取り巻く環境は著しく変化している。都市化による自然環境の減少、学歴社会や過密スケジュールによるゆとりの減少、それに伴う仲間集団の解体など、それらはしばしば『「三間」(空間・時間・仲間)の消失』と表現される。また、核家族化・少子化の影響による家庭環境や人間関係の変化、携帯電話・インターネットの普及によるコミュニケーションの多様化など、子どもをめぐる環境の変化は家庭、学校、地域を含んだ子どもの生活環境すべてにわたっている。

このような状況の中で、いじめや不登校などの子どもをめぐる社会問題は年々深刻になっており、近年においては少年犯罪の低年齢化・凶悪化も指摘されている。こうした多くの問題を抱えた現代の子どもの心理状態を安定・回復させるためには、一人になって自分を取り戻せる場や、気持ちが通じ合える人とのコミュニケーションの場などの「居場所」を持つことが非常に重要であるといえる。しかし、子どもを取り巻く環境の著しい変化が、時間面においても、空間面においても、人間関係の面においても、子どもが自分に適した「居場所」を持つことが困難な状況をつくり出していると考えられる。

これまでの研究をみると、「居場所」をタイトルやキーワードに用いたものはあまり多くはなく、小学生や中高生の「居場所」の現状を扱ったものが多少みられる程度である。しかし、現在の「居場所」の実態だけでは、子どもの「居場所」がどのように変化しているのかを捉えることはできず、現在の「居場所」の実

態や特徴を明らかにすることはできない。

そこで本研究では、子どもの「居場所」の変化を実証的に検討するために、まず「居場所」の定義及び理論的枠組みを考察した上で、子どもとその親を対象に調査を行い、異なる2つの世代を比較することにより、現在の子どもの「居場所」の実態とその特徴を捉えることを目的とする。なお、本研究では「居場所」を〈他者との関わり〉の視点から「社会的居場所」と「個人的居場所」に分類しているが、今回は特に「個人的居場所」について報告する。

2．研究方法と調査対象の概要

1）既研究の検討

「居場所」の概念は心理面と物理面の二つの要素を包括するため、研究の分野も多岐にわたる。そのため、既研究を〈社会学・教育学系〉と〈建築学・住居学系〉の二つに分類し、検討を行った。〈社会学・教育学系〉の既研究を表1に示す。〈社会学・教育学系〉では、不登校問題や対人関係を扱うものが多く、心理面からのアプローチに偏重しているといえる。(No. 1－No. 14) また、教育学という分野から、学校場面での「居場所」に関する考察が中心になっている。

一方、〈建築学・住居学系〉では表2に示すように、児童館や青少年センターといった社会施設についてのケーススタディがほとんどであり、物理的な側面が強いといえる。(No. 15－No. 29)

また、これらは住宅の中だけ、あるいは学校の中だけ、特定の社会施設だけに場面が限定されており、子どもの生活の一部分しか捉えられていない。(No. 30－No. 34) 中には家庭・学校・地域を取り上げて子どもの生活全体を捉えようとした研究も若干みられるが、数はまだ少なく内容も十分とはいえない。(No. 13, No 35－No 37)

「居場所」が心理面と物理面の双方を包括する概念であること、また、「居場所」はどのような生活場面でも存在しうることを考慮すると、「居場所」の実態を明らかにするためには子どもの生活全体を様々な角

表1　既研究①

〈社会学・教育学系〉

No.	発表年	論　文　名	発表誌名	著作者
1	1997年	オープン・スペースにおける子どもの居場所	日本教育心理学会総会発表論文集39巻	山下哲郎
2	1997年	不登校現象と子どもの「居場所」	山口大學文學會誌48巻	沖田寛子
3	1998年	子どもの居場所を求めて	愛知教育大学教育実践センター紀要創刊号	中野靖彦
4	1999年	子どもの心をとらえる「自由な空間」の研究：学校の中における子どもの居場所さがし	鳴門生徒指導研究9巻	辻映子・田中雄三
5	2000年	中学生・高校生を取り巻く環境と居場所づくり：グループワークの活用を軸として	人間福祉研究3巻	太田由加里
6	2001年	子どもの居場所とネットワーク	日本教育学会大会シンポジウム　課題研究発表要旨集録	住田正樹・溝田めぐみ
7	2001年	子どもは家族の中に居場所があるのか：家族福祉の力動理論的展開を目指して（総論編）	山口県立大学社会福祉学部紀要（2001年）	二村克行
8	2001年	「居場所」型施設における若者の関わり方：公的中高生施設「ゆう杉並」のエスノグラフィー	生涯学習・社会教育学研究　26巻	新谷周平
9	2001年	子ども・若者の居場所づくり	日本社会教育学会紀要 No. 37	大場孝弘
10	2001年	中学生の学校適応と居場所に関する研究	日本教育心理学会第43回総会発表論文集	稲葉小由紀・西悟史・古川雅文・浅川潔司
11	2002年	小中学生における居場所と生活意識に関する調査	発達心理学の探究第4号	石田直子・田澤実・照井裕子・半澤礼之・弘世純三・今村彩子　他
12	2002年	高校生の居場所と学校適応に関する研究	日本教育心理学会第44回総会発表論文集	檜皮万里子・淺川潔司・古川雅文
13	2003年	子どもの「居場所」と対人関係	子どもたちの「居場所」と対人的世界の現在（単行本）	住田正樹
14	2004年	小学校・中学校における居場所の検討	日本教育心理学会第46回総会発表論文集	宮下敏恵・石川もよ子

表 2　既研究②

〈建築学・住居学系〉

No.	発表年	論　文　名	発表誌名	著作者
15	1999 年	中高生の居場所からみた地域施設の利用実態と要求について　－児童青少年センター『ゆう杉並』を対象として　その 1－	日本建築学会学術講演梗概集（1999 年）	定行まり子・松木要詩子
16	2000 年	子どもの利用圏域と図書館像 ―子どもの居場所としての地域施設利用―	日本建築学会学術講演梗概集（2000 年）	大前祐樹・今井正次・中井孝幸・熊谷健太郎
17	2002 年	子どもの「学校外の居場所」における空間構成　日本のフリースクールにおける環境行動研究	日本建築学会学術講演梗概集（2002 年）	垣野義典・須田眞史・初見学・長澤泰
18	2000 年	佐倉市ヤングプラザの計画プロセスの分析 中高生の居場所づくりの試みに関する研究 その 1	日本建築学会学術講演梗概集（2000 年）	金丸まや・渡海裕司・鈴木毅・船橋國男・木多道宏
19	2000 年	ゆう杉並とヤングプラザの利用実態の分析 中高生の居場所づくりの試みに関する研究 その 2	日本建築学会学術講演梗概集（2000 年）	渡海裕司・金丸まや・鈴木毅・船橋國男・木多道宏
20	2000 年	中高生向け地域施設の利用実態－中高生の生活と居場所に関する研究・その 3－	日本建築学会学術講演梗概集（2000 年）	根橋由里子・定行まり子・松木要詩子
21	2001 年	中高生の児童館利用から見た施設空間の意味について　－中高生の生活と居場所に関する研究・その 4－	日本建築学会学術講演梗概集（2001 年）	根橋由里子・定行まり子
22	2001 年	日常生活における「佐倉市ヤングプラザ」「ゆう杉並」の使い方分析　－中高生の居場所づくりの試みに関する研究　その 3	日本建築学会学術講演梗概集（2001 年）	金丸まや・渡海裕司・鈴木毅・船橋國男・木多道宏・李斌
23	2002 年	児童館における中高生の行動と空間の関わりについて　中高生の生活と居場所に関する研究　その 5	日本建築学会学術講演梗概集（2002 年）	定行まり子・大橋真紀子・神山藍子
24	2002 年	児童館における中高生の居場所に求められる空間の質　中高生の生活と居場所に関する研究　その 6	日本建築学会学術講演梗概集（2002 年）	大橋真紀子・定行まり子
25	2002 年	発達段階からみた児童館の施設規模・空間構成と利用実態　中高生の生活と居場所に関する研究　その 7	日本建築学会学術講演梗概集（2002 年）	五十嵐宣子・定行まり子
26	2004 年	児童館における中高生対応についての考察 地域における中高生の居場所に関する研究 その 1	日本建築学会計画系論文集（2004 年 3 月）	定行まり子・根橋由里子
27	2004 年	既存施設の転用による居場所づくり　中高生の生活と居場所に関する研究　その 8	日本建築学会学術講演梗概集（2004 年）	近藤ふみ・定行まりこ・五十嵐宣子
28	2004 年	新宿区立榎町児童館における参画による居場所づくりの試み　中高生の生活と居場所に関する研究　その 9	日本建築学会学術講演梗概集（2004 年）	五十嵐宣子・定行まり子
29	2004 年	施設形態の違いによる子どもの居場所の考察 児童擁護施設における住環境に関する研究	日本建築学会学術講演梗概集（2004 年）	杉本範子・大原一興・小滝一正・藤岡泰寛
30	1999 年	住戸及び地域内における中・高生の居場所について	日本女子大学紀要家政学部　第 46 号	定行まり子・松木要詩子
31	2000 年	中高生の生活時間特性と自宅外の生活場所について　－中高生の生活と居場所に関する研究・その 1－	日本建築学会学術講演梗概集（2000 年）	定行まり子・松木要詩子
32	2000 年	中高生の住まいにおける生活行為・場所と評価　－中高生の生活と居場所に関する研究・その 2－	日本建築学会学術講演梗概集（2000 年）	松木要詩子・定行まり子
33	2002 年	子どもの居場所に関する研究	三重大学住居学研究室卒業論文	細野綾

No.	発表年	論　　文　　名	発 表 誌 名	著　作　者
34	2003 年	地域生活における子どもの居場所 ―大阪市都心部の小学校 3 校区の調査から―	生活科学研究誌 （2003 年度）	西川知子・小伊藤亜希子・上野勝代・奥野修・片方信也・室崎生子
35	2003 年	中学生の意識からみた家庭，学校，地域における居場所に関する考察	日本女子大学紀要家政学部　第 50 号	定行まり子・下戸由貴子
36	2004 年	家庭、学校、地域における子どもの居場所	三重大学教育学部研究紀要　第 55 巻	中島喜代子・倉田英理子
37	2005 年	変化する子どもの居場所	三重大学住居学研究室卒業論文	小長井明美

度から検討することが必要であると考えられる。

2）「居場所」の定義

「居場所」という言葉が使用され始めたのはそれほど古くなく、1980 年代後半になってからである。当初、「居場所」は学校に行かない、もしくは学校に行けない子どもの学校以外の行き場、すなわち、フリースペースやフリースクールの同義語として使用され、物理的側面の意味合いが強かったといえる。しかし、1990 年代に入ると、文部省も公文書などで「居場所」という言葉を使用するようになり、現在のように心理的側面からも居場所が語られるようになる。

しかし、これまで、「居場所」に関する研究はそれほど多くはなく、定義に関しても研究者によって異なっている。前納は居場所を「アイデンティティを実感できる場所」とし、住田は「自分を確認し、自己肯定感や安心感を実感できる場所」とし、田中は「他者との関わりのなかで自分の位置と将来の方向性を確認できる場所」としている。（表 3）これらは「アイデンティティ」「自分」「自分の位置」などを「実感」「確認」する場所と定義しており、藤竹の「自分の存在を確認できる場所」に集約できる。

このことから、本研究における「居場所」は「自分を確認できる場所」とする。

また、藤竹、中島らの研究を踏まえ、心理的側面の重要な要素である〈他者との関わり〉の視点から二つに分類し、「他者と関わりを持つことで自分を確認できる場所」を「社会的居場所」、「他者との関わりから離れて自分を確認できる場所」を「個人的居場所」と定義する。

表 3　既研究による「居場所」の定義

研究者	定　　義
前納	アイデンティティを実感できる場所[1]
住田	自分を確認し、自己肯定感や安心感を実感できる場所[2]
田中	他者との関わりのなかで自分の位置と将来の方向性を確認できる場所[3]
藤竹	自分の存在を確認できる場所[4]

3）「居場所」の枠組み

さらに、「居場所」を詳しく捉えるため、2 軸で構成する分析軸を設定した。

縦軸は物理的側面を表すもので、「空間の支配度」軸とする。これは物や空間に対する支配度の強弱の視点で捉えたものであり、テリトリーの考え方につながるものである。また、横軸は心理的側面を表すもので、「他者との関わり」軸とする。これは、他者との関わりの主目的が他者との「交流」にあるのか、他者からの「隔離」にあるのかに視点を置いている。これらの 2 軸を設定することにより、4 類型を得た。（図 1）なお、〈他者との関わり〉の視点で分類すると、A, B が「個人的居場所」、C, D が「社会的居場所」となる。

また、本研究では「個人的居場所」を、①一人になって考え事などをしたい時の居場所、②好きな事に集中したい時の居場所、③大人の目を避けたい時の居場所、④嫌な思いをしたり、ストレスをためた時の居場所、の4つのパターンに分類し、調査・検討を行った。

これを隔離・逃避要求の強弱で表すと、図 2 のようになる。心理的に隔離されていればよい①②に対して、

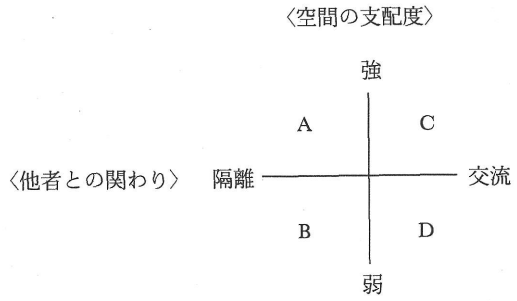

図 1　居場所の構造図

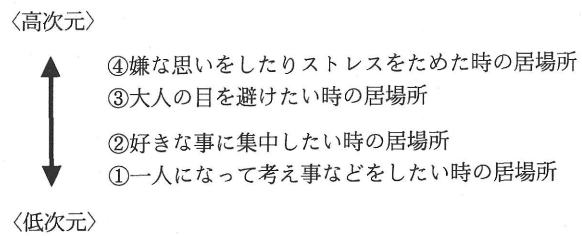

図 2　隔離・逃避要求

心理的にも物理的にも隔離が必要な③④は隔離・逃避要求も強くなっている。

4）調査方法と調査対象の概要

現在の子どもと、その親の子ども時代の「居場所」の実態を比較するため、三重県内のK高校の1，2年生492名とその保護者を対象に調査を実施した。その結果、309件の有効サンプルを得た。調査時期は2004年10月下旬である。表4に調査の概要を示す。また、本研究では現在の高校生を〈子ども世代〉、高校生の保護者を〈親世代〉と示し、〈親世代〉には主に高校生当時について調査した。また、本調査では「居場所」の中で「個人的居場所」のみを扱うこととする。

調査対象の高校生は、1年生と2年生がほぼ同数で、性別は女子がやや多い割合である。学年と性別について表5と表6に示す。保護者に関しては、年齢は平均44歳であり、ほとんどが母親である。したがって、調査回答は〈子ども世代〉と〈親世代〉の間で時間的に20〜30年の開きがあるといえる。保護者の年齢と性別について表7と表8に示す。また、調査対象の〈子ども世代〉は、自然環境に恵まれた地域に居住し、学校は進学校ではなく、受験勉強に追われず、仲間と遊ぶ時間も持ちやすい生活であると思われる。本調査は、このような『三間の消失』をしていない子どもと親世代との比較調査である。

表4　調査の概要

	件　数
配布数（部）	500
回収部（部）	335
回収率（%）	67.0
無効数（部）	26
有効数（部）	309
有効率（%）	92.2

表5　高校生の学年

	件　数	%
高校1年生	154	49.8
高校2年生	155	50.2
合　計	309	100

表6　高校生の性別

	件　数	%
男	143	46.9
女	162	53.1
計	305	100
無回答	4	−
合　計	309	−

3．調査結果と考察

本調査では、世代比較を通して子どもの居場所を捉える。しかし、調査対象者の〈子ども世代〉と〈親世代〉で性別比が異なるため、世代比較の結果に影響を与えることが考えられる。そこで、世代間比較の結果とあわせて、性別による違いからも調査結果を検討する。なお、紙面の都合上、性別による比較の結果を示す図は省略する。

1）親世代・子ども世代比較にみる調査対象の子どもの概要

本項では、子どもの居場所のあり方全般に対して、関連があると考えられる子どもの意識と性格について、検討する。

(1) 調査対象の子どもの意識

i. 打ち込んでいること

打ち込んでいることの種類によっては居場所の傾向に違いが出てくると考えられる。ここでは、大まかな特徴を捉えるため、〈人の要素〉〈場所の要素〉〈打ち込んでいることの性質〉の視点について図3に示す7項目からあてはまるもの全てを選択する方法で調査した。世代間比較の結果を同図に示す。

性別では、「体を動かすもの」に打ち込む割合は男子の方が多い以外には違いがみられない。（図省略）世代間では、「一人でするようなもの」「室内でするようなもの」「じっとしているようなもの」「体を動かすようなもの」は〈子ども世代〉の方が多く、世代で違いがみられた。「打ち込んでいるものはない」は〈親世代〉の方が多く、〈子ども世代〉の方が何かに打ち込んでいる割合が高いといえる。

表7　保護者の年齢

	件　数	%
30〜39歳	47	15.8
40〜49歳	217	72.8
50〜59歳	33	11.1
60歳〜	1	0.3
計	298	100
無回答	11	−
合　計	309	−

表8　保護者の性別

	件　数	%
父　親	40	13.1
母　親	265	86.9
計	305	100
無回答	4	−
合　計	309	−

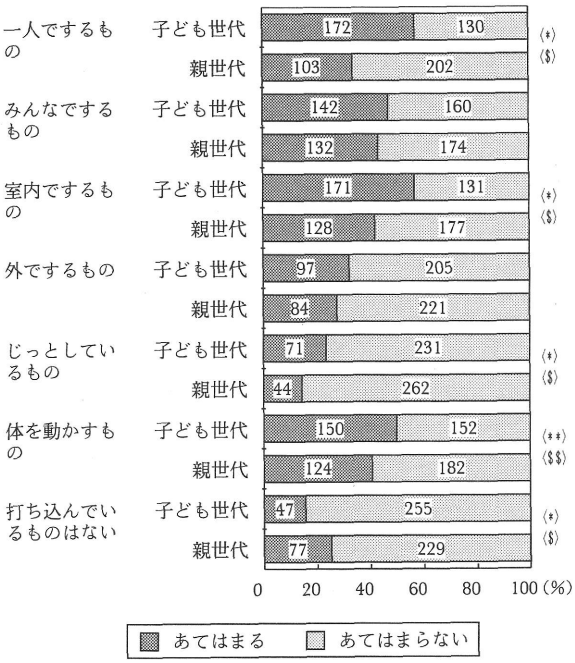

図3　打ち込んでいること　世代間比較

*…カイ二乗検定の有意水準１％をしめす
**…カイ二乗検定の有意水準５％をしめす
***…カイ二乗検定の有意水準10％をしめす
$…相関係数の有意性１％をしめす
$$…相関係数の有意性５％をしめす
$$$…相関係数の有意性10％をしめす

※グラフ内数値は件数

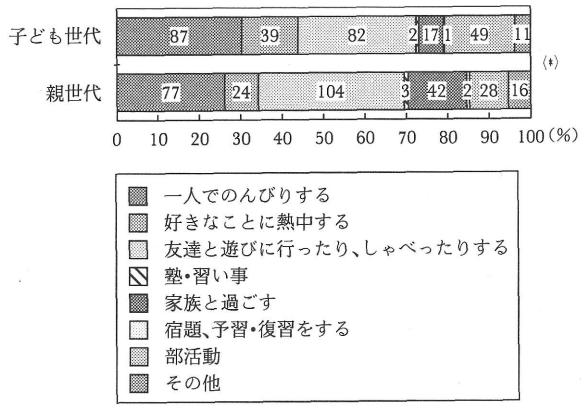

図4　休日の過ごし方　世代間比較

*…カイ二乗検定の有意水準１％をしめす
**…カイ二乗検定の有意水準５％をしめす
***…カイ二乗検定の有意水準10％をしめす

※グラフ内数値は件数

ii. 休日の過ごし方

休日は子どもの生活の中で自由に使える時間であり、休日をどのように過ごすかは子どもの居場所のあり方に大きく関係すると考えられる。そこで、図４に示す10個のカテゴリーから１つを選択する方法で調査した。世代間比較の結果を同図に示す。

性別による違いはみられない。（図省略）世代間で比較すると、両世代とも、休日を一人で過ごす子ども

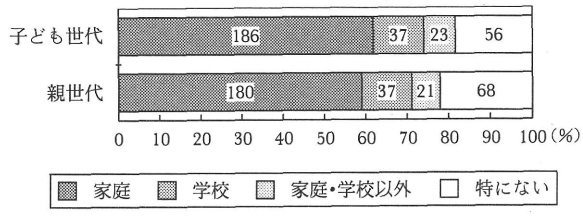

図5　居心地の良い所　世代間比較

※グラフ内数値は件数

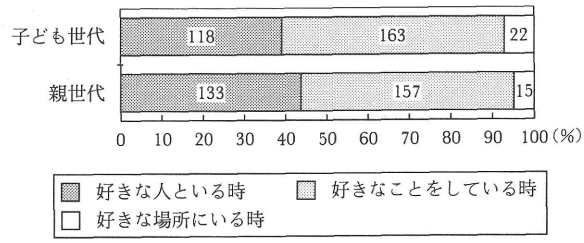

図6　好きな時間　世代間比較

※グラフ内数値は件数

と友達や家族と過ごす子どもの２パターンある。「一人でのんびりする」と「好きなことに熱中する」は〈子ども世代〉の方がやや多いが、「友達と遊びに行ったり、しゃべったりする」「家族と過ごす」は〈親世代〉の方がやや多いことから、休日を一人で過ごす傾向は〈子ども世代〉の方が強いと考えられる。

iii. 居心地の良い場所

子どもが生活の中でどの場所を一番居心地が良いと感じるのかを捉えるため、図５に示す４つのカテゴリーから１つを選択する方法で調査した。世代間比較の結果を同図に示す。

性別、世代間ともに違いはみられず、両世代とも、約６割が「家庭」を一番居心地が良いと感じており、「学校」「家庭・学校以外」は１割前後である。両世代とも、家庭を中心に居心地の良い場所をみつけているが、学校や地域に求めている子どももいるといえる。また、居心地の良い場所をみつけられない子どもも両世代とも2割いるという問題のあることが明らかになった。

iv. 好きな時間

子どもが居場所をみつける際にどのような要素が関係しているのかを捉えるために、子どもが好きな時間について図６に示す３つのカテゴリーから１つを選択する方法で調査した。世代間比較の結果を同図に示す。

性別による違いはほとんどみられない。（図省略）世代間でも変化はみられず、両世代ともに、「好きな人といる時」が約４割「好きなことをしている時」が約５割で、「好きな場所にいる時」はわずかである。好きな時間には〈行為の要素〉と〈人の要素〉が大きく関係している事が明らかになり、居場所をみつける際には、

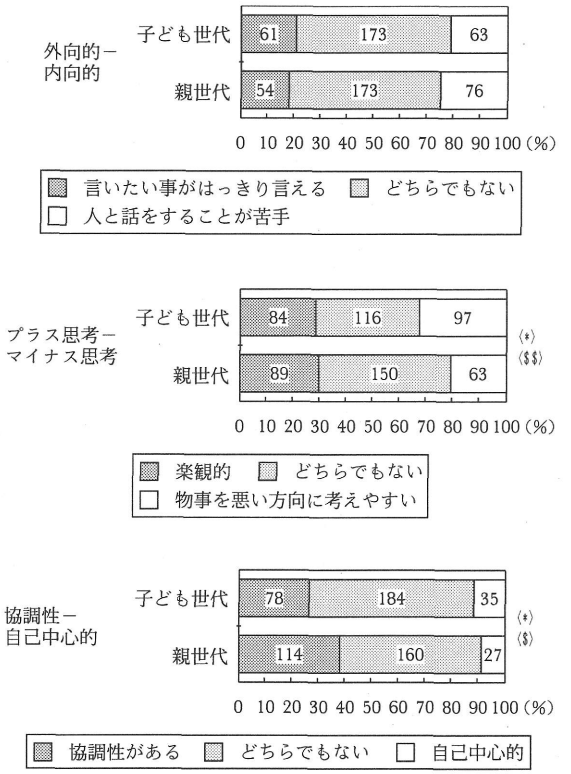

図7　性格について　世代間比較

*…カイ二乗検定の有意水準1％をしめす
**…カイ二乗検定の有意水準5％をしめす
***…カイ二乗検定の有意水準10％をしめす
$…相関係数の有意性1％をしめす
$$…相関係数の有意性5％をしめす
$$$…相関係数の有意性10％をしめす
※グラフ内数値は件数

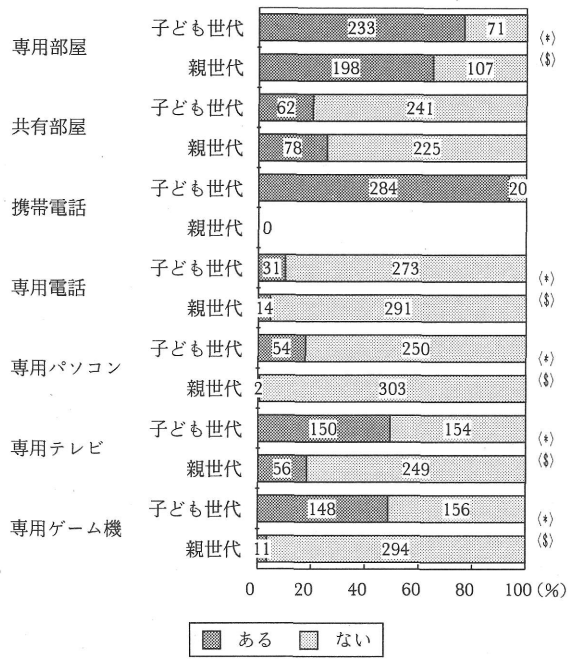

図8　所有物　世代間比較

*…カイ二乗検定の有意水準1％をしめす
**…カイ二乗検定の有意水準5％をしめす
***…カイ二乗検定の有意水準10％をしめす
$…相関係数の有意性1％をしめす
$$…相関係数の有意性5％をしめす
$$$…相関係数の有意性10％をしめす
※グラフ内数値は件数

その場所自体よりも、その場に誰がいて、何をするかということに重点が置かれていると考えられる。

(2) 調査対象の子どもの性格

性格によって、考え方や、人との関わり方等が異なり、居場所のあり方とも関係すると考えられる。子どもの性格の傾向を捉えるため、〈外向的―内向的〉と〈プラス思考―マイナス思考〉と〈協調性―自己中心的〉の側面について、図7に示す3つのカテゴリーからそれぞれ1つを選択する方法で調査した。世代間比較の結果を同図に示す。

性別による違いはみられない。(図省略) 世代間では、〈外向的－内向的〉の側面は違いがみられず、両世代とも特に外向的でも内向的でもない割合がほとんどである。〈プラス思考－マイナス思考〉〈協調性－自己中心的〉の側面では、〈子ども世代〉はマイナス思考や自己中心的な性格が多いが、〈親世代〉はプラス思考や協調性のある性格が多いという違いがみられた。

2）親世代・子ども世代比較にみる家庭における子どもの居場所

(1) 家庭における子どもの所有物

自分専用の個室や持ち物を所有することは、居場所のあり方に深く関わると考えられる。図8に示す、7種類の所有物について、その所有の有無を検討した。ただし、「携帯電話」の普及は最近になってからであるため、〈親世代〉では調査を行っていない。世代間比較の結果を同図に示す。

専用空間については、性別による違いはみられない。(図省略) 世代間では、専用部屋の所有率は〈子ども世代〉の方が高いという違いがみられたが、共有部屋については違いがみられなかった。このことから、〈子ども世代〉の子ども部屋の方が専用個室化しているといえる。

個人専用物について、性別では、携帯電話所有率は女子の方が高く、テレビ、テレビゲーム機は男子の方が高いという違いがみられた。(図省略) 世代間による違いもみられ、テレビとテレビゲーム、電話、パソコンの所有率は、いずれも〈子ども世代〉の方が高い。また、〈子ども世代〉では携帯電話を9割が所有している。したがって、個人専用物については〈子ども世代〉の方が充実しているといえる。

(2) 家庭における子どもの人間関係

本項では、家庭における子どもの居場所と深く関わる

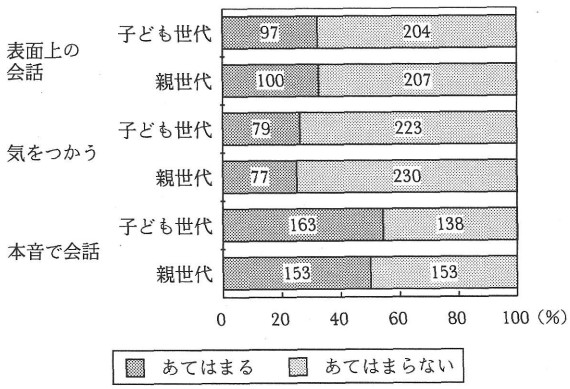

図9　親子関係　世代間比較

※グラフ内数値は件数

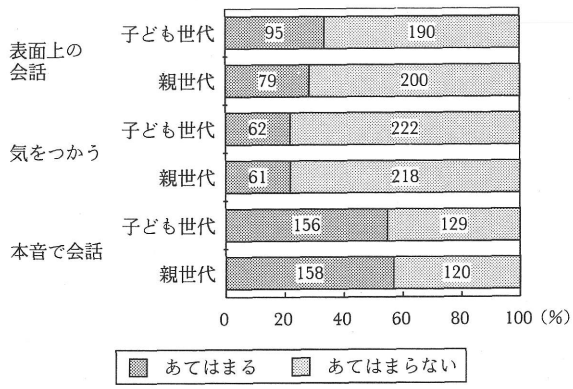

図10　きょうだいとの関係　世代間比較

※グラフ内数値は件数

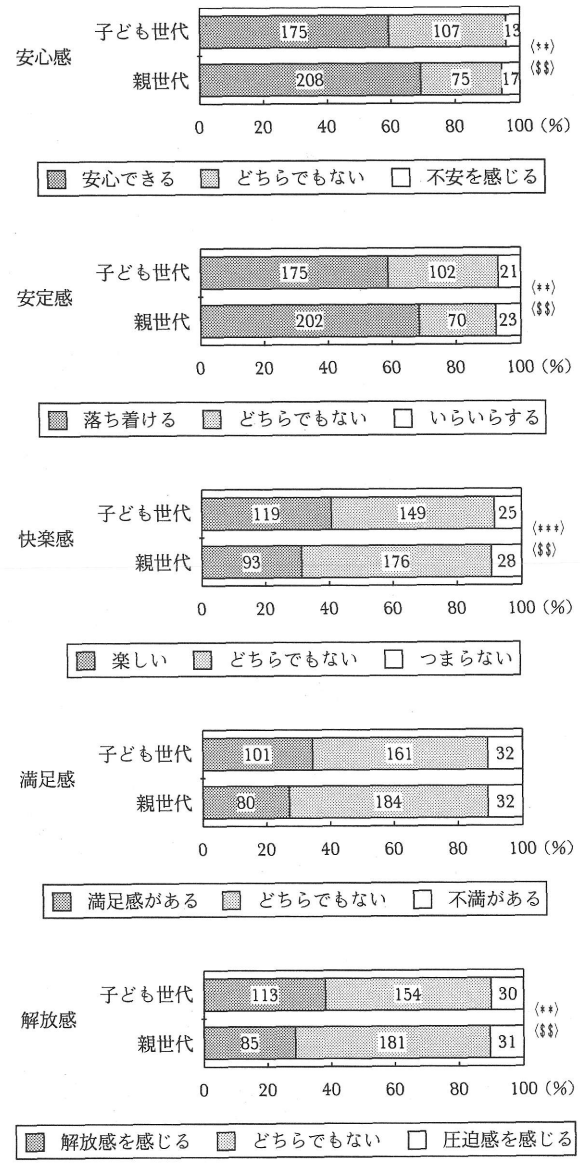

図11　家庭における心理状態　世代間比較

*…カイ二乗検定の有意水準１％をしめす
**…カイ二乗検定の有意水準５％をしめす
***…カイ二乗検定の有意水準10％をしめす
$…相関係数の有意性１％をしめす
$$…相関係数の有意性５％をしめす
$$$…相関係数の有意性10％をしめす

※グラフ内数値は件数

と考えられる人間関係について検討する。そこで、子どもがどのような人間関係をもっているのかを捉えるために、図9, 10に示す3項目についてあてはまるもの全てを選択する方法で調査した。世代間比較の結果を同図に示す。

i. 親子関係

性別では、「表面上の会話くらいしかしない」割合は男子の方が高いという違いがみられた。その他は違いがみられない。（図省略）世代間による違いはみられず、両世代とも、親と本音で話している子どもは5割しかなく、表面上の会話しかしない関係や親に気をつかう関係もそれぞれ2割ずつみられる。したがって、世代に関わりなく、親との関係が希薄な子どもが多いといえる。

ii. きょうだいとの関係

性別では、「表面上の会話くらいしかしない」割合は男子の方が高く、「本音で話し合う」割合は女子の方が高いという違いがみられた。（図省略）世代間による違いはみられず、両世代とも、きょうだいと本音で話している子どもは5割しかいない。表面上の会話しかしない関係は3割、きょうだいに気をつかう関係は2割おり、両世代ともきょうだいとの関係が希薄な子どもが多いといえる。

(3) 家庭における子どもの心理状態

i. 家庭における心理状態

家庭の居場所と深い関わりがあると考えられる、子どもの心理状態について検討する。心理状態を、図11に示す5つの側面から調査した。世代間比較の結果を同図に示す。

性別による違いはみられない。世代間では、両世代とも、「安心感」や「安定感」を感じる割合は6〜7割と高いが、「快楽感」「満足感」「解放感」を感じる割合は3〜4割と低い。世代間で比較をすると、「安心感」

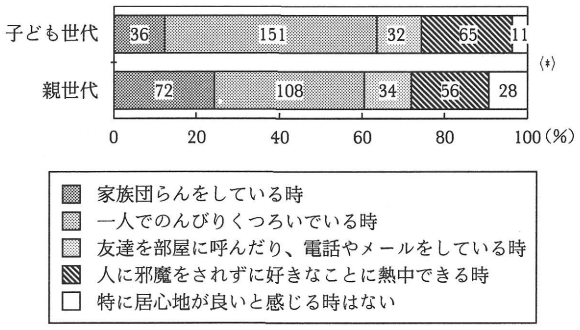

図12　家庭における居心地が良いと感じる時　世代間比較

*…カイ二乗検定の有意水準1%をしめす
**…カイ二乗検定の有意水準5%をしめす
***…カイ二乗検定の有意水準10%をしめす
※グラフ内数値は件数

「安定感」を感じる割合は〈親世代〉の方が1割多く、「快楽感」「解放感」は〈子ども世代〉の方が1割多いという違いがみられた。「快楽感」「解放感」を感じる割合が〈子ども世代〉の方が高い要因としては、〈子ども世代〉での専用個室化や専用物の充実が考えられる。また、「安心感」「安定感」の割合が低くなっている要因としては、家庭における人間関係で世代に変化がなかったことを考慮すると、〈子ども世代〉では家庭外のストレスなどが多く、それを家庭内に持ち込んでいることによると推測される。

ii. 家庭における居心地

家庭における居心地を捉えるため、家庭における居心地の良い時について、図12に示す5つのカテゴリーから1つを選択する方法で調査した。世代間比較の結果を同図に示す。

性別による違いはみられない。(図省略) 世代間で比較すると、両世代とも、一人でいる時に居心地の良さを感じる傾向があるといえる。さらに、〈子ども世代〉の方が「一人でのんびりしている時」の割合が1割高く、「家族団らんをしている時」は〈親世代〉の方が1割高いという違いがみられたことから、〈子ども世代〉の方が家庭で一人でいる時に居心地よく感じる傾向が強いと考えられる。

(4) 家庭における子どもの個人的居場所

家庭における個人的居場所の実態を捉えるため、「一人になって考え事などをしたい時の場所」「好きなことに集中できる場所」「大人の目を避けられる場所」「嫌な思いをしたり、ストレスをためた時にいられる場所」の4項目について、家庭にあるもの全てを選択する方法で調査した。世代間比較の結果を図13に示す。

性別では、「一人になって考え事などをする時の場所」の所有率は男子の方がやや高いという違いがみられた。その他の項目では違いはみられない。(図省略) 世代間で比較すると、両世代とも「一人になって考え事などをする時の場所」「好きなことに集中できる場所」の所有率は7〜8割と高く、「大人の目を避けられる場所」「嫌な思いをしたり、ストレスをためた時にいられる場所」は約5割と低い。このことから、低次元の隔離・逃避要求に対応できる場所の所有率は高いが、高次元の隔離・逃避要求に対応できる場所の所有率は低いといえる。「好きなことに集中できる場所」は〈子ども世代〉が1割多く、世代で違いがみられた。これは、先述した、〈子ども世代〉における子ども部屋の専用個室化や個人専用物の充実によるものと考えられる。しかし、この他の個人的居場所の所有率に違いがみられなかったことを考慮すると、単に専用個室があっても、高次元の隔離・逃避要求に対応できる場所はみつけられないと考えられる。

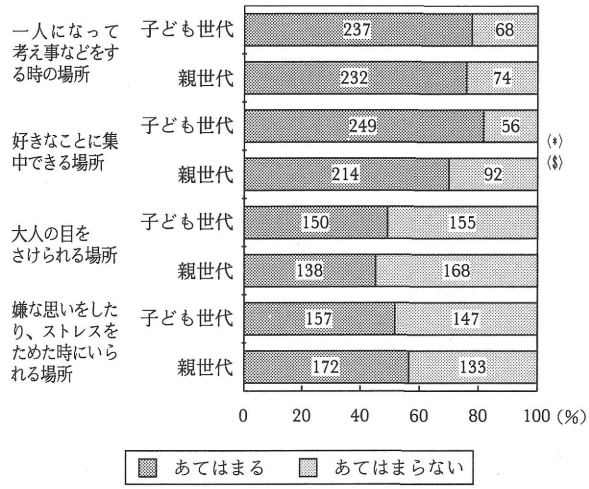

図13　家庭における個人的居場所　世代間比較

*…カイ二乗検定の有意水準1%をしめす
**…カイ二乗検定の有意水準5%をしめす
***…カイ二乗検定の有意水準10%をしめす
$…相関係数の有意性1%をしめす
$$…相関係数の有意性5%をしめす
$$$…相関係数の有意性10%をしめす
※グラフ内数値は件数

3) 親世代・子ども世代比較にみる学校における子どもの居場所

(1) 学校における子どもの人間関係

学校における子どもの居場所に大きく関係すると考えられる、学校における人間関係について、家庭の場合と同様に、先生、友達との関係について調査した。世代間比較の結果を図14, 15に示す。

i. 先生との関係

性別、世代間ともに違いはみられず、両世代とも「表面上の会話くらいしかしない」が約7割、「仲が良いが、関係を悪くしないよう気をつかうことがある」「本音で話し合っている」はそれぞれ約2割である。したがって、世代に関わらず、ほとんどの子どもが先生との関係は希薄であるといえる。

ii. 友達との関係

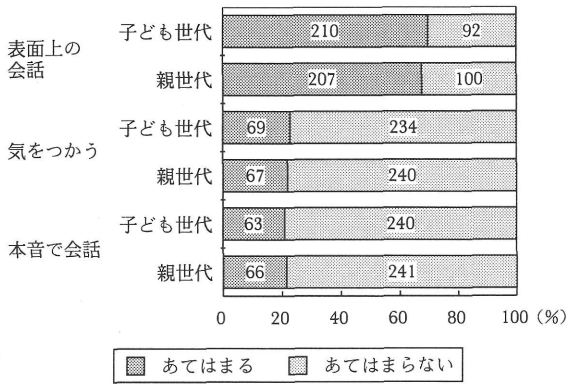

図14　先生との関係　世代間比較

※グラフ内数値は件数

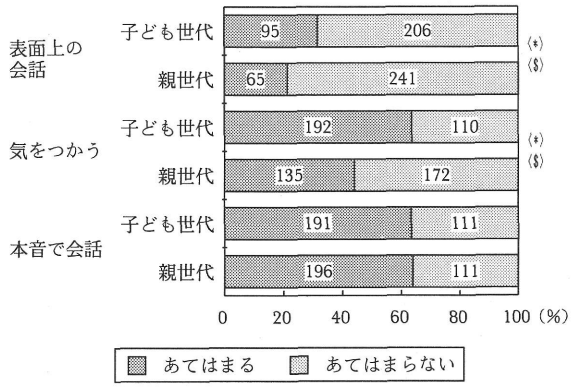

図15　友達との関係　世代間比較

*…カイ二乗検定の有意水準１％をしめす
**…カイ二乗検定の有意水準５％をしめす
***…カイ二乗検定の有意水準10％をしめす
$…相関係数の有意性１％をしめす
$$…相関係数の有意性５％をしめす
$$$…相関係数の有意性10％をしめす

※グラフ内数値は件数

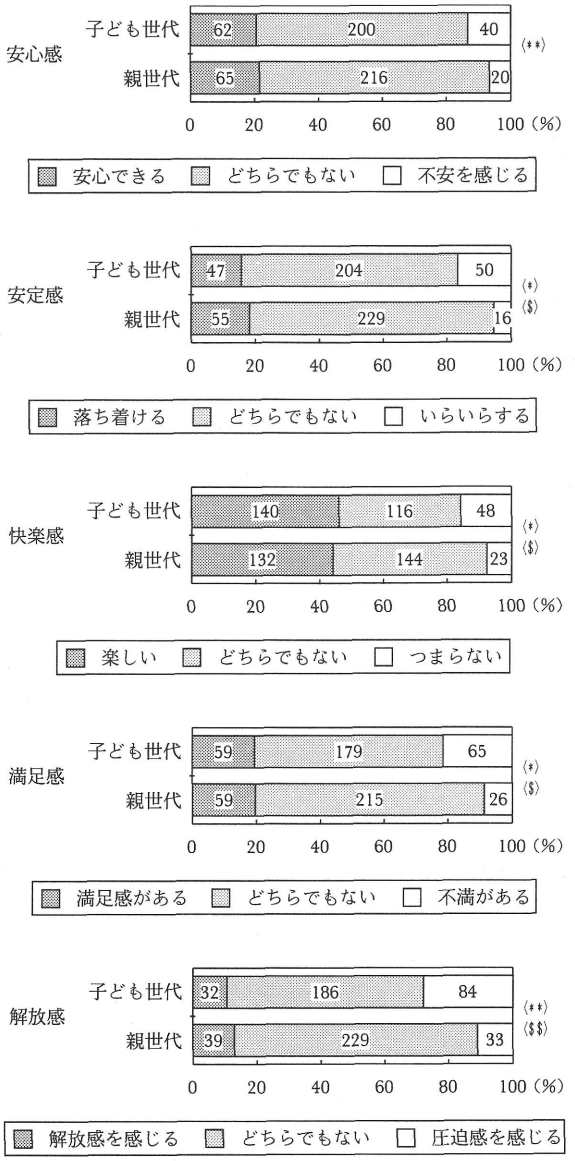

図16　学校における心理状態　世代間比較

*…カイ二乗検定の有意水準１％をしめす
**…カイ二乗検定の有意水準５％をしめす
***…カイ二乗検定の有意水準10％をしめす
$…相関係数の有意性１％をしめす
$$…相関係数の有意性５％をしめす
$$$…相関係数の有意性10％をしめす

※グラフ内数値は件数

性別による違いはみられない。（図省略）世代間で比較すると、両世代とも「本音で話し合っている」は約６割しかいない。「表面上の会話くらいしかしない」は〈子ども世代〉の方が１割多く、「仲が良いが、関係を悪くしないよう気をつかうことがある」は〈子ども世代〉の方が２割も多いという違いがみられた。したがって、〈子ども世代〉の方が友人関係が希薄化しているといえる。

(2) 学校における子どもの心理状態

i. 学校における心理状態

家庭の場合と同様に、学校における子どもの心理状態について検討する。世代間比較の結果を図16に示す。

性別では、「快楽感」を感じる割合は女子の方が２割多いという違い以外には違いがみられない。（図省略）世代間で比較すると、両世代とも「快楽感」の割合は約4割だが、「安心感」「安定感」「満足感」「解放感」を感じる割合は1〜2割と低く、家庭の心理状態より悪い。また、心理状態のマイナス評価である「不安を感じる」「いらいらする」「つまらない」「不満がある」「圧迫感を感じる」は世代で違いがみられ、〈子ども世代〉の方がマイナスの心理状態の割合が高い。したがって、〈子ども世代〉の方が学校における心理状態は悪いといえる。

ii. 学校における居心地

家庭の場合と同様に、学校における子どもの居心地について検討する。図17に示す５つのカテゴリーから１つを選択する方法で調査した。世代間比較の結果を同図に示す。

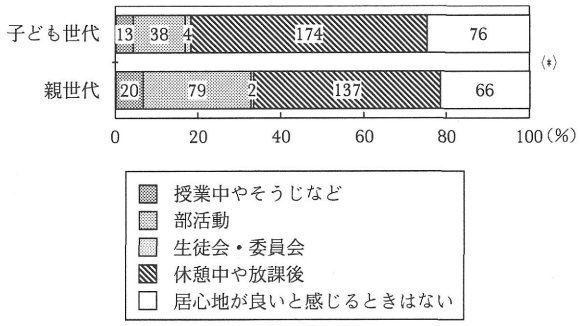

図17　学校における居心地が良いと感じる時　世代間比較

*…カイ二乗検定の有意水準1%をしめす
**…カイ二乗検定の有意水準5%をしめす
***…カイ二乗検定の有意水準10%をしめす
※グラフ内数値は件数

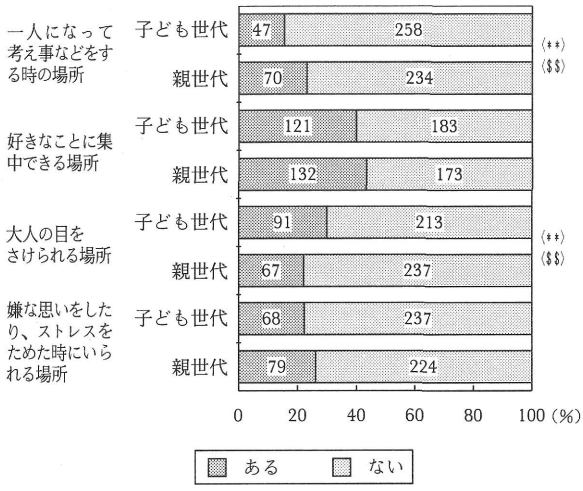

図18　学校における個人的居場所　世代間比較

*…カイ二乗検定の有意水準1%をしめす
**…カイ二乗検定の有意水準5%をしめす
***…カイ二乗検定の有意水準10%をしめす
$…相関係数の有意性1%をしめす
$$…相関係数の有意性5%をしめす
$$$…相関係数の有意性10%をしめす
※グラフ内数値は件数

性別による違いはみられない。(図省略) 世代間で比較すると、両世代とも、ほとんどが休憩中や放課後といった学校生活の中で自由な時間に居心地の良さを感じている。世代間で、「休憩中、放課後」に居心地の良さを感じる割合は〈子ども世代〉の方が2割高いが、「部活動をしているとき」の割合は〈親世代〉の方が1割高いという違いがみられた。したがって、〈子ども世代〉の方がより自由な時間に居心地の良さを感じており、学校のような管理社会になじめなくなっていると考えられる。

(3) 学校における子どもの個人的居場所

家庭の場合と同様に、学校における子どもの個人的居場所の実態を調査した。世代間比較の結果を図18に示す。

性別では、「好きなことに集中できる場所」の所有率は男子の方が高いという違いがみられた。その他は

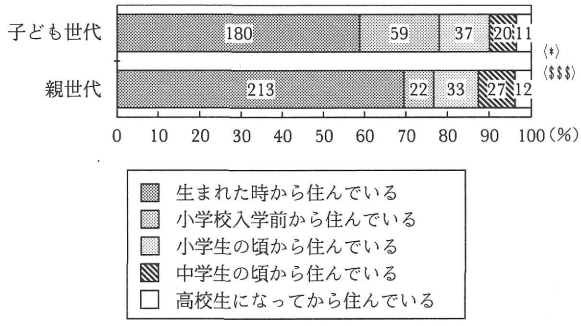

図19　居住年数　世代間比較

*…カイ二乗検定の有意水準1%をしめす
**…カイ二乗検定の有意水準5%をしめす
***…カイ二乗検定の有意水準10%をしめす
$…相関係数の有意性1%をしめす
$$…相関係数の有意性5%をしめす
$$$…相関係数の有意性10%をしめす
※グラフ内数値は件数

違いがみられない。(図省略) 世代間で比較すると、両世代とも「好きな事に集中できる場所」の所有率は4割、その他の項目は1〜3割と低く、家庭の場合より低い所有率である。「好きなことに集中できる場所」の所有率が他項目と比べ高いのは部活動など打ち込めるものを持っている子どもがいることと関係すると思われる。学校における個人的居場所の所有率の低さは学校のような場所で隔離・逃避することのできる場所をみつけることは困難であることと関係していると思われる。世代間の違いについては、「一人になって考え事などをする時の場所」は〈親世代〉の方が1割高く、「大人の目を避けられる場所」は〈子ども世代〉の方が1割高いという違いがみられた。

4) 親世代・子ども世代比較にみる地域における子どもの居場所

(1) 地域における子どもの居住環境

本項では、地域において子どもの居場所に関連があると考えられる居住環境について検討する。

i. 居住年数

居住年数は長ければ、それだけ地域に慣れ、地域における居場所のあり方に関係すると考えられる。居住年数について、図19に示す5つのカテゴリーの中から1つを選択する方法で調査した。世代間比較の結果を同図に示す。

性別、世代間ともに違いはみられず、両世代とも、「生まれた時から住んでいる」または「小学校入学前から住んでいる」割合がほとんどであり、居住年数は長いといえる。

ii. 地域の自然環境

地域において自然は、居場所と大きく関わる環境であると考えられる。子どもが居住している地域ついて検討するため、地域の範囲を「家の近くで歩いて行け

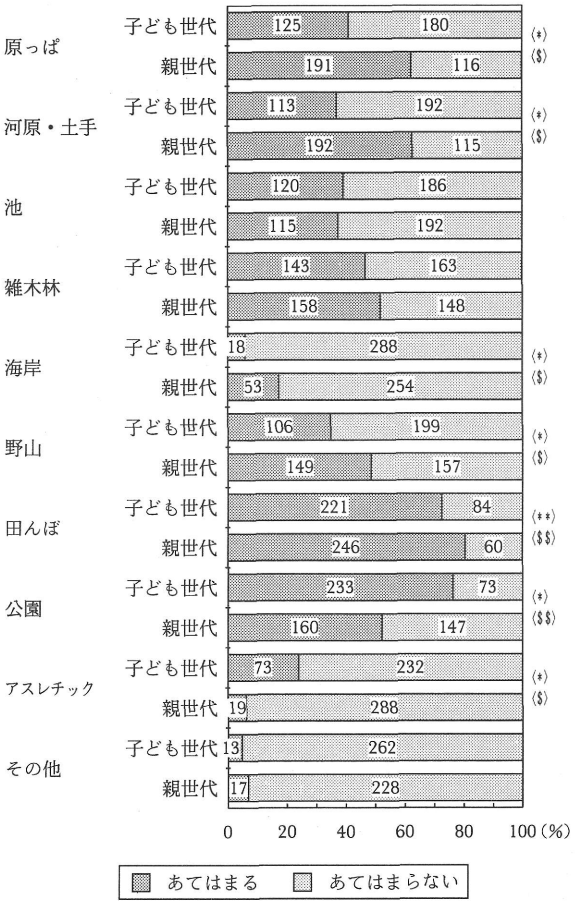

図20　自然環境　世代間比較

*…カイ二乗検定の有意水準１％をしめす
**…カイ二乗検定の有意水準５％をしめす
***…カイ二乗検定の有意水準10％をしめす
$…相関係数の有意性１％をしめす
$$…相関係数の有意性５％をしめす
$$$…相関係数の有意性10％をしめす
※グラフ内数値は件数

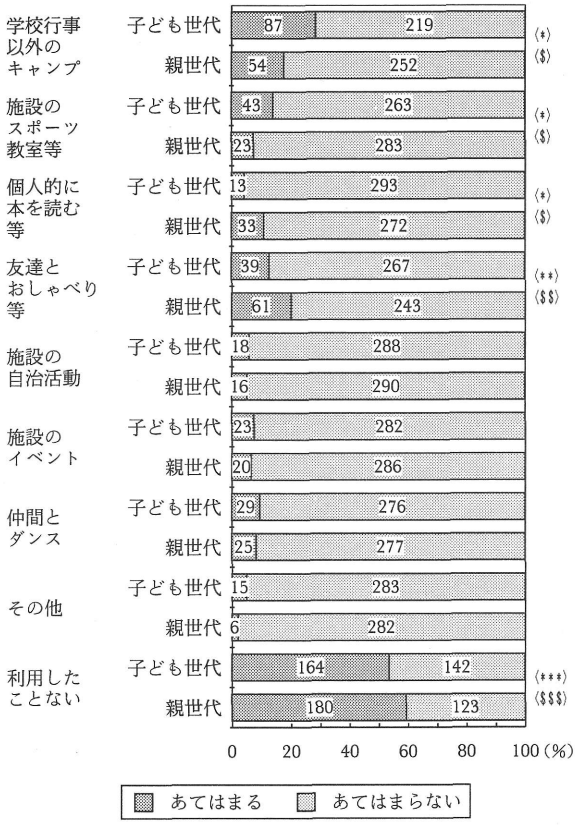

図21　青少年施設利用　世代間比較

*…カイ二乗検定の有意水準１％をしめす
**…カイ二乗検定の有意水準５％をしめす
***…カイ二乗検定の有意水準10％をしめす
$…相関係数の有意性１％をしめす
$$…相関係数の有意性５％をしめす
$$$…相関係数の有意性10％をしめす
※グラフ内数値は件数

る範囲」として、そこにある自然を図20に示す10項目の中からあてはまるもの全てを選択する方法で調査した。世代間比較の結果を同図に示す。

性別による違いはみられない。（図省略）世代間では、自然環境全般でみると、両世代とも自然の多い環境に居住しているといえる。原っぱ、河原・土手のような本来の自然は〈親世代〉の方が多いが、公園、アスレチックのような人工的な自然は〈子ども世代〉の方が多いという違いがみられた。

iii.　青少年施設

青少年施設は、公共的な居場所として機能するように研究が進められ、改良されている所もある。そこで、実際に子どもはどのように活用しているのかを検討する。

青少年施設の利用目的について図21に示す9項目で、あてはまるもの全てを選択する方法で調査した。世代間比較の結果を同図に示す。

性別では、「個人的に本を読む等」「友達とおしゃべり等」の割合は男子の方がやや多いという違いがみられた。その他は違いがみられない。（図省略）世代間で比較すると、両世代とも、「利用したことがない」が約6割で、利用率は低いといえる。利用目的では、「学校行事以外のキャンプやバーベキューをする」「施設で行われているスポーツ教室や体験教室に参加する」は〈子ども世代〉の方が多く、「個人的に本を読んだり、気ままに過ごす」「友達としゃべったり、遊んだりする」は〈親世代〉の方が多いという違いがみられた。すなわち、〈子ども世代〉では施設で企画された行事等に参加するという受け身的な利用の方が多いが、〈親世代〉では個人的な利用が多いといえる。

iv.　よく行くお店

最近では自然環境が減少するかわりに、いろいろなお店ができ、その用途も多様化してきており、地域における居場所に深く関わると考えられる。そこで、お店が居場所としてどのように活用されているか捉えるため、普段よく行くお店について、図22に示す5つのカテゴリーから1つを選択する方法で調査した。世代間比較の結果を同図に示す。

性別では、「本を立ち読みしたり、買い物したり、

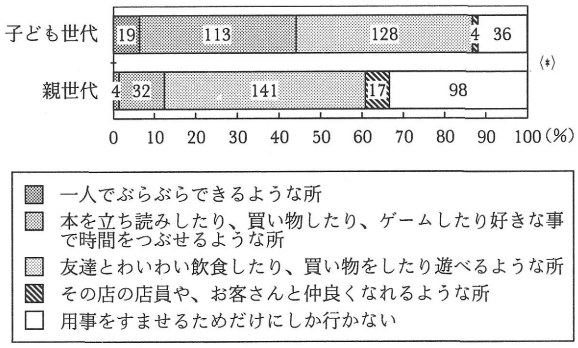

図22　よく行くお店の種類　世代間比較

*…カイ二乗検定の有意水準１％をしめす
**…カイ二乗検定の有意水準５％をしめす
***…カイ二乗検定の有意水準10％をしめす
※グラフ内数値は件数

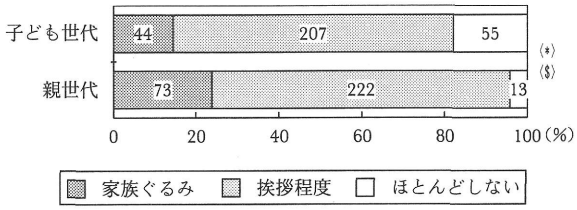

図23　近所付き合い　世代間比較

*…カイ二乗検定の有意水準１％をしめす
**…カイ二乗検定の有意水準５％をしめす
***…カイ二乗検定の有意水準10％をしめす
$…相関係数の有意性１％をしめす
$$…相関係数の有意性５％をしめす
$$$…相関係数の有意性10％をしめす
※グラフ内数値は件数

ゲームしたり好きなことで時間をつぶせるような所」の割合は男子の方が２割多いが、「友達とわいわいと飲食したり、買い物をしたり遊べるような所」は女子の方が３割多いという違いがみられた。（図省略）世代間で比較すると、両世代とも「友達とわいわいと飲食したり、買い物をしたり遊べるような所」は約４割で、交流の場としての利用は世代で違いがみられない。「本を立ち読みしたり、買い物したり、ゲームしたり好きな事で時間をつぶせるような所」は〈子ども世代〉の方が３割多く、「用事をすませるためだけにしか行かない」は〈親世代〉の方が多いという違いがみられた。したがって、〈子ども世代〉の方がお店を多用途に利用していると考えられる。

(2) 地域における子どもの人間関係

子どもの居場所に関係すると考えられる、地域における人間関係について検討する。

i. 近所付合い

近所付き合いについて、図23に示す３つのカテゴリーから１つを選択する方法で調査した。世代間比較の結果を同図に示す。

性別による違いはみられない。（図省略）世代間で比較すると、両世代とも「あいさつくらいはしている」

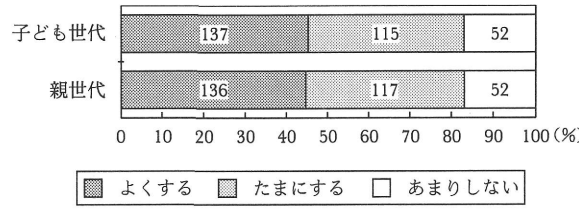

図24　家庭・学校以外で仲間と集まる頻度　世代間比較

※グラフ内数値は件数

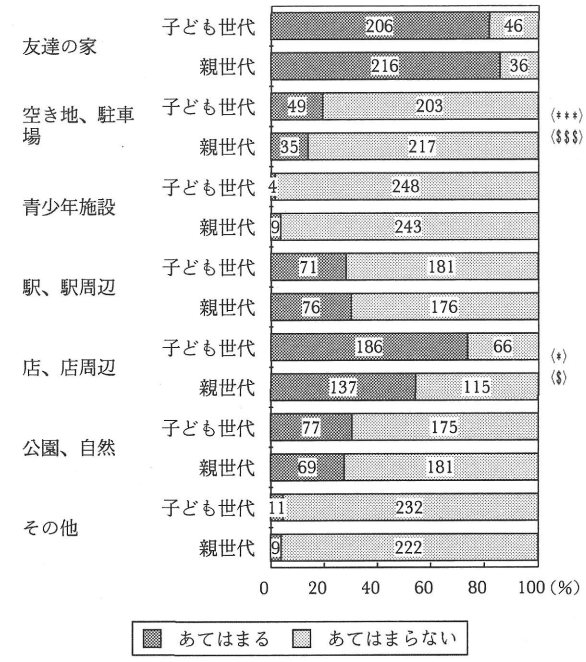

図25　仲間と集まる場所　世代間比較

*…カイ二乗検定の有意水準１％をしめす
**…カイ二乗検定の有意水準５％をしめす
***…カイ二乗検定の有意水準10％をしめす
$…相関係数の有意性１％をしめす
$$…相関係数の有意性５％をしめす
$$$…相関係数の有意性10％をしめす
※グラフ内数値は件数

が6〜7割と、ほとんどの子どもが近所と親しい付き合いをしていないと考えられる。「家族ぐるみで交流している」は〈親世代〉の方が多く、「近所付き合いはほとんどしていない」は〈子ども世代〉の方が多いという違いがみられたことから、〈子ども世代〉の近所付き合いの方が希薄であるといえる。

ii. 友達と集まる頻度とその場所

地域での友人関係を把握するために、家庭、学校以外にはどの程度友達と交流があるのかを調査し、検討する。家庭、学校以外で、友達や仲間と集まる頻度について図24に示す３つのカテゴリーから１つを選択する方法で調査した。世代間比較の結果を同図に示す。また、集まる場所について図25に示す７項目で、あてはまるものすべてを選択する方法で調査した。世代間比較の結果を同図に示す。

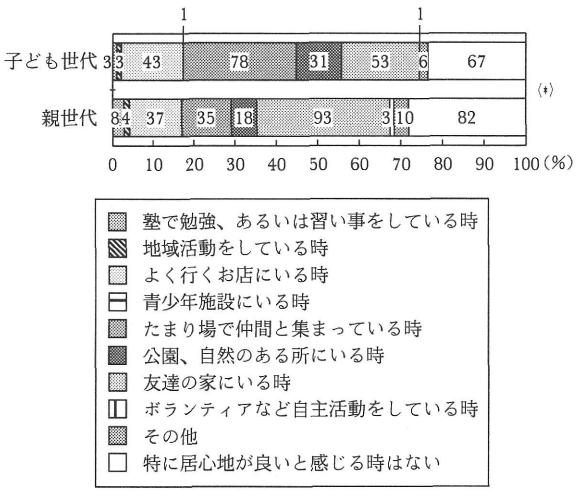

図26　地域における居心地が良いと感じる時　世代間比較

*…カイ二乗検定の有意水準１％をしめす
**…カイ二乗検定の有意水準５％をしめす
***…カイ二乗検定の有意水準10％をしめす
※グラフ内数値は件数

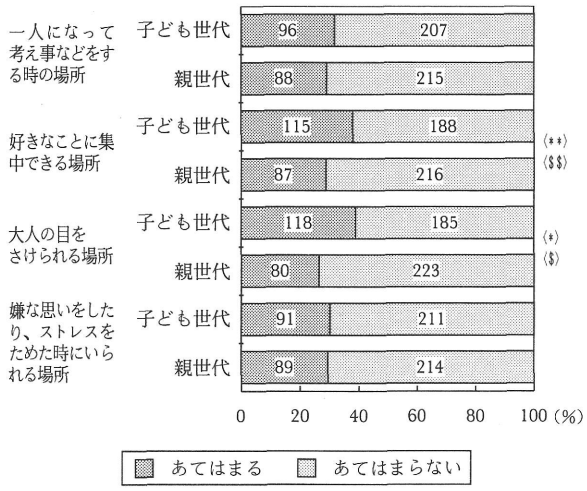

図27　地域における個人的居場所　世代間比較

*…カイ二乗検定の有意水準１％をしめす
**…カイ二乗検定の有意水準５％をしめす
***…カイ二乗検定の有意水準10％をしめす
$…相関係数の有意性１％をしめす
$$…相関係数の有意性５％をしめす
$$$…相関係数の有意性10％をしめす
※グラフ内数値は件数

友達と集まる頻度は、性別、世代間とも違いはみられない。両世代とも「よくする」「たまにする」がほとんどであり、ほとんどの子どもが仲間と集まっている。

集まる場所については、性別では、「駅、駅周辺」「店、店周辺」を利用する割合は女子の方が多いという違いがみられた。その他は違いがみられない。（図省略）世代間で比較すると、両世代とも「友達の家」が８割と場所の中で最も多い。「店、店周辺」は〈子ども世代〉の方が約2割多いという違いがあり、交流の場としての店の利用が多くなっているといえる。

(3) 地域における子どもの心理状態

地域における子どもの心理状態を捉えるため、「地域における居心地」について調査し、検討する。

i. 地域における居心地

家庭、学校の場合と同様に、地域における子どもの居心地について検討する。図26に示す10個のカテゴリーから１つを選択する方法で調査した。世代間比較の結果を同図に示す。

性別による違いはみられない。（図省略）世代間で比較すると、〈親世代〉では、「友達の家」に居心地の良さを感じている子どもが多いが、〈子ども世代〉では少なく、逆に〈子ども世代〉では「たまり場」に居心地の良さを感じる子どもが多いという違いがみられた。このことから、〈子ども世代〉では友達の家よりもより匿名的な場所であるたまり場に居心地の良さを感じていると考えられる。

(4) 地域における子どもの個人的居場所

家庭、学校の場合と同様に、地域における子どもの個人的居場所の実態について調査した。世代間比較の結果を図27に示す。

性別では、すべての項目において、男子の方が所有率が1〜2割高いという違いがみられた。（図省略）世代間で比較すると、両世代とも個人的居場所の所有率は3〜4割と、家庭の場合より低い所有率である。「好きなことに集中できる場所」と「大人の目を避けられる場所」は〈子ども世代〉の方が1割多いという違いがみられた。〈子ども世代〉でみられた、お店を多用途に利用したり、たまり場を居心地よく感じる傾向を考慮すると、地域において、物理的な隔離・逃避をできるような場所の利用が多くなったことと関係があると推測される。また、性別における違いが世代間の違いに影響していることも考えられる。

5）親世代・子ども世代比較にみる家庭・学校・地域における子どもの居場所

(1) 家庭・学校・地域全体でみた子どもの個人的居場所

子どもの個人的居場所所有について、家庭、学校、地域全体で捉えるため、それぞれの個人的居場所の所有率を表９に示す。

全体的にみると、家庭は学校や地域に比べ個人的居場所の所有率が高い。これは、家庭には子ども部屋があることが大きく影響していると考えられる。しかし、子ども部屋所有率が高くても、高次元の隔離・逃避要求に対応できる場所の所有率は低い。また、学校、地域は子ども部屋のような場所はないため、本来ならば、一人になれるような個人的居場所はないと思われる。しかし、実際にこれらの場所に個人的居場所を持っており、学校や地域でも個人的居場所になり得るような

表9　家庭・学校・地域全体でみた個人的居場所

	家庭		学校		地域	
	子ども世代	親世代	子ども世代	親世代	子ども世代	親世代
一人になって考え事などをする時の場所	8割	8割	1割	2割	3割	3割
好きなことに集中できる場所	8割	7割	4割	4割	4割	3割
大人の目を避けられる場所	5割	5割	3割	2割	4割	3割
嫌な思いをしたり、ストレスをためた時にいられる場所	5割	5割	3割	3割	3割	3割

…世代間で違いのある部分を示す

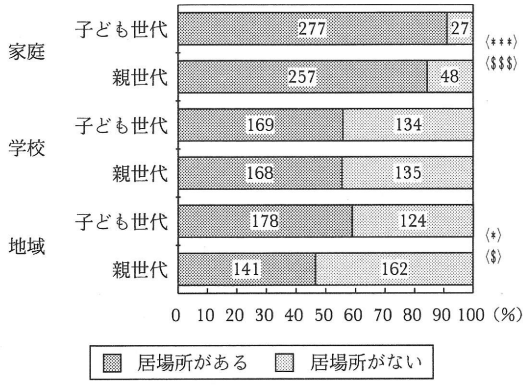

図28　家庭・学校・地域それぞれにおける個人的居場所の有無

*…カイ二乗検定の有意水準1%をしめす
**…カイ二乗検定の有意水準5%をしめす
***…カイ二乗検定の有意水準10%をしめす
$…相関係数の有意性1%をしめす
$$…相関係数の有意性5%をしめす
$$$…相関係数の有意性10%をしめす

※グラフ内数値は件数

場所があると考えられる。

(2) 家庭・学校・地域それぞれにおける個人的居場所

家庭・学校・地域において、なんらかの個人的居場所を持つ子どもの割合を図28に示す。

両世代とも家庭に個人的居場所を持つ子どもの割合が高い。世代間を比較すると、〈子ども世代〉の方が、家庭あるいは地域に個人的居場所を持つ子どもの割合が多いという違いがみられた。また、性別では違いがみられない。(図省略)

(3) 子どもの居場所パターン

家庭・学校・地域のうち、どの場所に個人的居場所を持っている子どもがどれだけいるかを示すと、8通りのパターンがみられ、これを個人的居場所パターンとする。結果を図29に示す。

世代間で比較をすると、〈子ども世代〉の方が多いパターンは、「家庭・学校・地域全てに個人的居場所のある子ども」と「家庭・地域にある子ども」である。

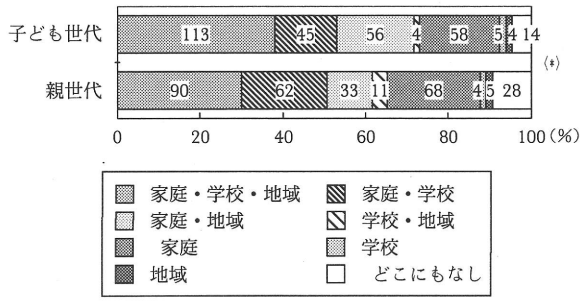

図29　居場所パターン

*…カイ二乗検定の有意水準1%をしめす
**…カイ二乗検定の有意水準5%をしめす
***…カイ二乗検定の有意水準10%をしめす

※グラフ内数値は件数

逆に、〈親世代〉の方が多いパターンは、「家庭・学校にある子ども」と「どこにも居場所のない子ども」である。したがって、〈子ども世代〉の方が家庭、地域における個人的居場所の所有率は高くなっているが、学校における個人的居場所はみつけにくくなっているといえる。これは、〈子ども世代〉の方が家庭において子ども部屋の専用個室化、地域ではお店を多用途に利用していることと関係していると考えられる。また、性別では違いがみられない。(図省略)

また、両世代ともに、家庭・学校・地域すべてにある子どもは3〜4割おり、どこにも居場所のない子どもも0.5〜1割存在している。

家庭に個人的居場所のある子どもが多い中、家庭にはないが、学校や地域にはある子どもも5〜7%みられる。このことから、個人的居場所の中心となる場所は家庭であるが、それ以外の場所に個人的居場所を求めている子どももおり、学校や地域が個人的居場所を補完していることが明らかになった。

4. おわりに

現在、「子どもの「居場所」がない」といわれているが、子どもの「居場所」がどのように変化したのか実証的に研究されていない。そこで本研究では、子どもの「居場所」を世代間比較を通して検討し、現在の子どもの「居場所」の実態と特徴を明らかにする事を目的としている。この目的を達成するため、「居場所」の定義および理論的枠組みを考察した上で、高校生とその保護者を対象に調査を行った。本研究では、「居場所」を〈他者との関わり〉の視点から「社会的居場所」と「個人的場所」に分類した。さらに、「個人的居場所」についてはその意味内容と要求の次元から4つの種類に分けて調査し検討した。なお、今回は特に「個人的居場所」についての報告である。調査の結果、以下の知見を得た。

1）親世代・子ども世代比較にみる調査対象の子どもの概要

居心地の良い場所については、両世代とも、家庭を中心に居心地の良い場所をみつけているが、どこにもみつけられない子どもも2割いることが明らかになった。好きな時間についてみると、人の要素や、行為の要素が重要であり、単に空間があるだけでは居場所にならないということも世代で共通の傾向である。

打ち込んでいることでは、〈子ども世代〉の方が打ち込むものを持つ割合が高いという違いがみられた。休日の過ごし方では、〈子ども世代〉の方が一人で過ごす傾向が強いという違いがみられた。性格では、マイナス思考や自己中心的な性格は〈子ども世代〉の方が多いという違いがみられた。

2）親世代・子ども世代比較にみる家庭における子どもの居場所

子どもの所有物では、〈子ども世代〉の方が子ども部屋の専用個室化が進んでおり、専用物も充実しているということが明らかになった。

人間関係では、世代間で違いはみられず、親やきょうだいとの「本音で話し合える関係」は半数程度と、希薄な関係が多いことが捉えられた。

心理状態では、両世代とも比較的良い心理状態であるが、「快楽感」「解放感」は〈子ども世代〉の方が高く、「安心感」「安定感」は〈親世代〉の方が高いという違いがみられた。居心地の面では、両世代とも、一人でいる時の居心地が最も良いとする割合が高いが、〈子ども世代〉ではさらにこの傾向が強いことが捉えられた。

個人的居場所の所有についてみると、両世代とも、所有率は高いが、高次元の隔離・逃避要求に対応できる場所の所有率は低い。〈子ども世代〉の方が「好きなことに集中できる場所」の所有率が高いという違いがみられ、これには専用個室化や物が充実していることが要因として考えられる。しかし、専用部屋があっても、高次元の隔離・逃避要求に対応できる場所を持っていないものもみられ、専用部屋があるだけでは、これらの場所を得られないものと考えられる。

3）親世代・子ども世代比較にみる学校における子どもの居場所

人間関係についてみると、先生との関係は両世代とも希薄な子どもが多い。友達との関係は、〈子ども世代〉の方が希薄化しているという違いがみられた。

心理状態では、両世代とも家庭の場合より悪いが、〈子ども世代〉の方がさらにマイナスの心理状態である割合が高いという違いがあり、〈子ども世代〉の方が学校における心理状態が悪いことが明らかになった。居心地の面では、両世代とも「休憩中や放課後」という自由な時間に居心地のよさを感じる割合が高いが、〈子ども世代〉の方がさらにこの傾向が強い。したがって、現在の子どもは学校のような管理社会になじめなくなっていると考えられる。

個人的居場所の所有についてみると、両世代とも家庭の場合よりも所有率は低く、学校は個人的居場所を得にくい環境であることが明らかになった。

4）親世代・子ども世代比較にみる地域における子どもの居場所

両世代とも居住年数は長く、自然環境の多い所に住んでいる。青少年施設の利用も少ないことから、これらの場所は居場所としてあまり利用されていないと考えられる。よく行くお店についてみると、お店を友達との交流場所として利用する割合は世代で共通であるが、好きなことで時間をつぶせるようなお店の利用は〈子ども世代〉の方が多く、〈子ども世代〉の方がお店の利用の仕方が多用途になっていることが捉えられた。

人間関係についてみると、近所付き合いの面では、〈子ども世代〉の方が希薄化していることが明らかになった。友達と集まる頻度とその場所についてみると、集まる頻度は世代間で違いがなく、ほとんどが家庭や学校以外の場所で友達と集まっている。その場所については、〈子ども世代〉の方がお店を利用する割合が高く、交流の場としてのお店の利用が多くなっている。

心理状態についてみると、居心地の面では、〈親世代〉では友達の家を居心地良く感じる割合が多いことに対し、〈子ども世代〉ではたまり場の割合が最も高いという違いがみられ、〈子ども世代〉の方が匿名的な場所を居心地良く感じる割合が高いといえる。

個人的居場所の所有については、両世代とも3〜4割と、家庭の場合よりも低い。「好きなことに集中できる場所」「大人の目を避けられる場所」の所有率は〈子ども世代〉の方が高い。これは、〈子ども世代〉の方が、お店を多用途に利用したり、たまり場に居心地の良さを感じる傾向が強いことと関係していると推測される。また、性別における違いが影響していることも考えられる。

5）親世代・子ども世代比較にみる家庭・学校・地域における子どもの居場所

個人的居場所の所有率を家庭・学校・地域全体でみると、家庭における所有率が高く、家庭が個人的居場所の中心となっていることが捉えられた。これは、子ども部屋の存在が大きく関係していると考えられるが、

子ども部屋があるだけでは、高次元の隔離・逃避要求に対応できる場所を確保できないことが明らかになった。

家庭・学校・地域において、何らかの個人的居場所を持つ子どもの割合をみると、〈子ども世代〉の方が、家庭あるいは地域における個人的居場所の所有率が高くなっている。これは、個室の充実や地域のお店の充実が関係していると考えられる。

居場所パターンについてみても、「家庭・学校・地域全てに個人的居場所のある子ども」と「家庭・地域にある子ども」のパターンは〈子ども世代〉の方が多くなっており、家庭や地域に居場所をみつける子どもが多くなっている。しかし、学校における個人的居場所の所有率は世代で変化はみられない。両世代とも、何らかの場所に居場所をみつけている子どもがほとんどだが、どこにも居場所のないものも0.5〜1割いることが明らかになった。

家庭に個人的居場所のある子どもが多いなか、家庭にはないが他の場所にある子どもも5〜7％いるということから、個人的居場所の中心は家庭だが、それ以外の場所に求める子どもも存在していることが明らかになった。

本調査は、世代間比較を通して子どもの「居場所」について検討し、現在の子どもの「居場所」の実態や特徴を明らかにした。現在の子どもは「(空間・時間・仲間）三間」を失うという環境の変化によって、「居場所」を持つことが困難であるといわれている。しかし、このような環境の変化は強弱があると考えられる。本研究は、まず、「三間の消失」をしていない子どもの状況を探ることから始めようとしたものである。本調査の調査対象は自然に恵まれた所に居住している高校生で、受験勉強に追われず、仲間と遊ぶ時間も持ちやすい生活をしており、以前との環境変化は大きくないといえる。このように「三間の消失」をしていない子どもが対象であるため、〈親世代〉よりも〈子ども世代〉の方が個人的居場所の所有率が高いという調査結果が得られた。したがって今後は、「三間の消失」をしていると考えられる子どもを対象に調査を行う予定である。

注

1）前納弘武「夫の居場所」、藤竹暁編『現代人の居場所』（『現代のエスプリ』生活文化シリーズ3）pp 171－182、至文堂、2000年

2）住田正樹「子どもたちの「居場所」と対人的世界」、住田正樹・南博文編『子どもたちの「居場所」と対人的世界の現在』pp 3－14、九州大学出版会、2003年

3）田中治彦「関わりの場としての「居場所」の構想」、田中治彦編『子ども・若者の居場所の構想』pp 7－11、学陽書房、2001年

4）藤竹暁「居場所を考える」、藤竹暁編『現代人の居場所』（『現代のエスプリ』生活文化シリーズ3）pp 47－57、至文堂、2000年